

1 一日目 降りかかった災い

1.1

「相沢君、声、やたらに高くなってない？」

相沢祐一の声の高さを指摘する、男性の低い声。その声に、祐一は反論を試みる。

「そう言う香里も、声、かなり低くなってる気がするぞ」

「そう？ ……って、これ、何よ!？」

その男声の持ち主 美坂香里は、自らののどに触れ、奇妙な突起の感触を得る。骨のような、骨ではないような……。押さえつけてみると、首を絞められているような苦しさを覚える。

「のどに、変な突起があるわ」

「それ、喉仏じゃないか？」

喉仏。男性が声変わりするとき、のどに現れる小さな突起。女性にもあるにはあるが、男性と違い、はっきり感じることはできない。

「つまり、あたし、男になったの？」

そう言って、香里は胸と股間に手をやる。胸の膨らみは完全に消え、股間には奇妙なものがくっついている感じがした。その事実、香里が声にした疑問を証明していた。

「うそ、どうして？」

「さあな」

「待って」

香里は、祐一の声がやたらと高いことを思い出した。改めて祐一を観察すると、プレザーから、胸と腰のラインがはっきり見て取れる。さっきは、そんなことはなかった。

「とすることは！」

香里は、祐一ののどに手をやる。

「香里、苦しい……」

「ちょっと我慢しなさい」

香里は、自らの手に残された感触を確かめる。

「やっぱり」

喉仏がない。

「相沢君、あなた、女になってるわ」

香里から祐一へ、信じられない一言が飛ぶ。しかし、一笑に付するわけには行かない。そう宣言する香里自身が、男になっているのだから。

「マジかよ……」

おそろおそろ、股間に手を伸ばす祐一。そこに、男のシンボルはなかった。

私立カノン学園。

雪国といえば雪国、雪が少ないと言えば少ない。しかし、毎年子供が遊べる程度の雪が、冬場には常に存在する。積雪は30センチより多くなることも少なくなることもなく、夏も冬も非常に過ごしやすい環境にある場所。

市街の人口はそれほど多くもなく、逆に少ないと言うこともない。下町の親しみと、近代都市の利便性を併せ持った、小さい都会。周辺地域も含め、たくさんの小学校と、いくつかの中学校と、ふたつの高校と、一つの大学。その中には含まれない、幼稚舎から大学まで一貫教育を施している私立学園。それが、私立カノン学園。

そんな学校に、祐一が転校してきてから早2ヶ月半。いとこの水瀬名雪の紹介により、転校生としては異例の早さで、美坂香里、北川潤をはじめとしたクラスメイトを作ることができた。

また、不治の病を持った少女が恋人になると、彼女の病が嘘のように治ったという不思議な伝説を持っているのも、彼を紹介する上での貴重なエピソードといえる。彼女の名前は美坂 葵^{しおり}。病気が完治した今では、元気に学校に通っている というわけではなく、出席日数の関係ですでに留年が決定していたこともあり、人生の春休みを謳歌^{おうか}しているところである。

先週末、学園の文化祭が行われ、祐一はクラスメイトたちと共に、転校後初めての文化祭を満喫した。屋台、占い、クイズ大会と定番のものから、小説や漫画の販売、活動レポートの展示会などなど、この学園も他に負けないようににぎわいを見せていた。特に、開催時期が他とずれているということもあって、他校の教師や生徒による見学がとて多いのが、祐一にとっては印象的だった。

文化祭翌日、代休前の昼下がり。祐一・名雪・香里の3人は、学校一のお嬢様と評判の3年生・倉田佐祐理^{くらた さゆり}に、お弁当をごちそうになっていた。理由は知らない。向こうが誘ってきたのだ。その場にいるもうひとりと一緒に、お弁当をいただく3人。そして、その場で自己紹介が始まる。

「あははーっ、佐祐理は、倉田佐祐理っていいです。佐祐理って呼んでくださいねーっ」

「ええ、分かりました、佐祐理さん。俺は相沢祐一、祐一でいいです」

「あたしは美坂香里。お好きに呼んでいただいて結構です、倉田先輩」

「わたしは水瀬名雪です。先輩、よろしくお願いいたします」

「……川澄舞^{かわすみまい}」

自己紹介が終わり、しばし雑談を楽しむ。

雑談の内容は、もっぱら各人の学園生活についてだった。舞と佐祐理の進路、香里の成績、祐一が転校してきた経緯^{いきさつ}……。

途中、名雪の部活の話になったところで、名雪が「ごめん、文化祭の片づけがあったの忘れてた」と、その場を急いで退席したのは残念だったが、とても楽しく充実したお茶会だったといえよう。

「ちょっとお手洗いに行行って来ますね」

だから、佐祐理のこの言葉が波乱を呼び起こすとは、誰も思っていなかった。

佐祐理が席を立ってから、わずか数分の後。

「……たこさんウィンナー、おいしい」

マイペースで箸を進める舞のとなりで。

「っ……！」

祐一が、突然頭を抱えて苦しみ出す。

「相沢君、どうしたの……痛っ！」

隣にいた、香里も頭痛を訴える。

極度の頭痛に苦しむ祐一と香里。舞は苦痛を訴えるふたりに対して、何の行動も起こさなかった。というよりは、起こせなかったという方が正解かもしれない。しょせん、彼女は世間知らずの高校生なのだ。

それから、さらに10分も経とうか、と言う頃。

「舞、相沢さん、美坂さん、ただいま〜」

と言って、ゆっくりと戻ってくる佐祐理。

「……って、どうしたんですか!？」

祐一たち2人の異変に気がつく。

「大変、舞、すぐに手当てしなくちゃ！」

そう言って、佐祐理は、懐に忍び込ませてあった錠剤を取り出すが、

「……ダメ」

その手を、舞が制する。

「……下手な薬は体の毒。落ち着くまで待とう」

保健室に連れて行くには人手が足りない。症状の原因が分からない以上、下手な薬は使えない。舞と佐祐理には、人を呼ぶという発想はなかった。舞の言葉に従い、ふたりの上級生は、祈るような目で、苦しむ下級生ふたりを見つめていた。

「……ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「……はあ、はあ、はあ……」

頭痛がだんだん収まってきたのか、2人は酸素を求めて、呼吸を荒くする。佐祐理が、泣きそうな目で2人を見つめる。後輩の無事を確認した舞は、昼食の後かたづけにはいる。

「香里、大丈夫か」

そう言って、祐一は顔を香里に向ける。

（香里が、男に見える？）

香里を見た瞬間、祐一が持った疑問。髪型が変わったわけでも、服装が替わったわけでもない。顔だって、普段のままである。

なぜ？

収まってきたとはいえ、未だに続く頭痛の中で、祐一はぼんやりと考える。そして、呼吸が収まってきた頃、嘘のように頭痛が消えた。

同じように体調が快復してきた、香里が指摘する。

「相沢君、声、やたらに高くなってない？」

そして、先ほど語ったように、祐一と香里は、自らの性別が逆転していることを知る。

1.2

「本当にごめんなさい、佐祐理のせいで」

佐祐理が、祐一と香里に、頭を深々と下げる。

「いえ、倉田先輩が悪いわけではありませんので」

「でも」

「大丈夫です、相沢君にはあの『水瀬秋子』がついてますから」

祐一と香里が逆切れしない理由。

水瀬秋子。謎の多い、自称『兼業主婦のお姉さん』。

あらゆる分野に精通し、あらゆる専門家の能力を備えるという超人。彼女がどんな特技を持っているか、全てを知るものは誰ひとりとしていない。彼女を頼ることのできる立場にあるからこそ、まだ精神的に余裕はあった。その名前を知っているのか、佐祐理はとりあえずほっとした表情を浮かべる。

「それでは、何かありましたらご連絡ください」

一礼して佐祐理はその場を離れた。

文化祭の片づけを終え、それでも部活だからと簡単な筋力トレーニングのメニューをこなしている名雪の元へ、部員から一通の封筒が届けられた。

「誰から？」

「髪の毛の長い、かっこいいけど女装してる男の人と、ショートヘアーで可愛いんだけど、背が高くて男装してる女の人です。どっちも、なんか変に緊張してる風でしたけど……」

「名前は？」

「手紙を渡せば分かるって……」

「ありがと、お疲れさま」

「では、失礼します」

部員が離れたあと、名雪は封筒の中身に目を通した（表1）。

私が男になって、
相沢君が女になってしまいました。
助けてください。
6時頃、百花屋で待っています。
美坂香里

表 1: 名雪の受け取った手紙

字は確かに香里の書いた字で間違いない。問題はその内容。どう見ても、頭から信じていい内容ではない。この手紙の送り主は、なぜわざわざ目立つような風貌をしていたのか。祐一ならば、面倒なことは避けて香里に任せるに違いない。香里ならば、面倒な荷物は置いて自分で届けるに違いない。二人とも来ていた。しかし、名雪には直接会っていなかった。

『どっちも、なんか変に緊張してる風でしたけど……』

部員の言葉が、名雪の頭をよぎる。そうやって見ると、手紙の内容は確かにおかしい。性別が変わるなんてあり得ない。香里が丁寧語、これも怪しい。『助けてください』なんて、香里が書くはずがない。

「これは、畏だよ……絶対に、引がかかっちゃいけないよ」

その手紙をジャージのポケットにつっこみながら、名雪はつぶやいた。

夜9時。百花屋。「蛍の光」の曲に乗せて、「本日は、ご利用ありがとうございました」の声が聞こえる。

「結局、名雪は来なかったわね」

「ああ。帰れるかどうか不安になってきた」

「明日が代休で、本当によかったわ」

女装した美男子と、男装した美少女。二人の学生は、コーヒー代をそれぞれ3人分ずつと夕食代を支払い、喫茶店を後にする。学生にとってかなりの出費。高校生ともなれば、相当な痛手だった。

「どうする？」

「一か八か、相沢君の家に戻ってみるしかないでしょう」

「せめて、名雪に会えたなら違ったんだけどな」

「本当にね」

私立カノン学園の制服を倒錯的に着た二人は、愚痴をこぼしながら水瀬家へと向かった。

水瀬家・正門前。

「ちょっと待っててくれ」

「お願い」

香里に見守られて、祐一は水瀬家のドアを開ける。

「ただいま」

祐一の声に反応して、キッチンから玄関へ足音が聞こえる。足音が止まり、家の主人が顔を見せる。彼女は、祐一を見て嬉しそうに声を発した。

「お帰りなさい、真琴^{まこと}」

「真琴じゃなくて祐一なんです」

お約束のボケと解釈し、祐一はお笑いのつつこみが如く秋子に意見した。しかし、

「あら、ずいぶんうまく、祐一さんに化けたわね」

お笑いの約束ではなく、本気だったようだ。

「ですから」

「でもね、真琴、性別まではごまかせるものじゃないのよ」

「秋子さん」

「さあ、おいしいご飯ができてますよ」

「百花屋で食ってきたからいらないです、それより！」

声を荒くすることで、やっと秋子のペースを断ち切る。しかし、秋子は目の前の少女を沢渡真琴と信じて疑っていないようである。

沢渡真琴。祐一がこの町に引っ越してきて、しばらく居候をしていた少女。2週間もいなかったその少女の正体は、春の訪れと共に秋子の口から祐一に示された。その正体は、狐。子供の頃に祐一が助けた子狐が、姿を変えて戻ってきたのだと秋子は言う。しかし、そんな非科学的な話を、祐一が信じるわけがなかった。祐一自身が女性化したという非科学的な事実を信じることはできないが、これはさらに信頼の置けない概念である。

「何で、狐が化けるという非科学は信じられて、それと同等程度しか非科学的性質を持たない『偶発的性転換』という可能性がいっさい吟味されないんですか！」

「真琴、難しい言葉を使うようになったわね」

「だから、真琴じゃなくて、祐一なんです、俺は！」

「え？」

秋子の、表情が一気に凍り付く。

「本当に、祐一さん？」

「そうです。それでは、偶発的性転換のサンプルを、もうひとり見せましょう」

祐一はそう言って、玄関先にいる人間に声をかけた。

「香里、入ってきていいぞ」

「遅いわよ」

ぶつくさ文句を言いながら、水瀬家の玄関に、もうひとりが入ってくる。

「どうも、お邪魔します。秋子さん、お久しぶりです」

「……香里ちゃん？」

秋子の目が、だんだんうつろになっていく。それもそうだろう。こんな非科学的なことを、一日で2例、見せられたのでは。祐一と香里は自らの身に起こった事実の非常識さを、あらためて痛感した。

1.3

「と言うわけで、明日、また来ますのでよろしく願いいたします」

簡単な状況説明をした後、香里は自宅に足を向けることにした。秋子の表情は（見るものが見れば）怪訝であったが、夜が遅いこともあり、細かい説明は翌日に回されることになった。

水瀬家を出て、帰路に就く。行く道はひたすら暗闇。門限をとっくにすぎた時間。慣れた道とはいえ、少しだけ恐怖がある。

「……野宿だけは、避けたいわね……」

男の身体に女子用制服は、じつはかなりきつい。体に合わないショーツも、かなり苦しいのが本音である。しかし、替えの服を全く持っていないのだから仕方がない。一刻も早く着替えたいと思いながら、そして、着替えるものがあるかどうかを考えながら。

「香里ちゃん、大丈夫かしら」

「本人が大丈夫って言ってるんだから、大丈夫ですよ。それに、今の香里は男ですから」

祐一が、秋子の心配を解消しようと、声をかける。

「いえ、そうではなく、家の方」

「あ、そっちですか。……でも、きっと香里のことだから、何とかしますよ」

そう言って、いやな予感を振りきろうとする祐一。香里の家で起きた事態の顛末は、意外なものだった。

香里は、美坂家の玄関に到着した。鍵を開けて、家の中へ。この時間なら、父は帰ってきていなくて、母と妹は寝ているはずである。少なくとも、ばれるまでにタイムラグがある。

「あら……？」

……と思ったのが間違いだった。

「母さん、どうした？」

「あなた、ちょっと……」

父は早くに帰ってきていて、母はまだ寝ていなかった。玄関先にいる、自分のところへ両親が駆けつける。両親の、自分をまじまじと見つめる視線が痛い。香里はそんなことを考えながら、父が告げる次の句を待った。

「質量・エネルギー変換の公式は？」

「Eイコールm掛けるcの自乗」

アインシュタインの相対性理論。名前を知っている人は多くいるだろうが、高校生で公式を知っている人間は限られる。香里は、子供の頃に琴に頼まれて、よくこの公式を暗号にしたものである。

この暗号を聞くと、父の表情は急に軟らかくなる。実は、この公式は父から教わった公式の一つでもある。

「やっぱり、香里か。男になってたから、一瞬分からなかったじゃないか」

「父さん」

「いやぁ、父さんは嬉しいぞ」

「何でよ」

「倉田家のお嬢さんは、ご自分が聡明でいらっしゃるのに、さらに聡明な人が好きと言うではないか。それを昨日証明し、そして今日は男になってくるとは……さすがだ、香里よ」

確かに、昨日の文化祭で開催されたクイズ大会では、香里と祐一と佐祐理でトップを争い、結果的に僅差で香里が勝利した。ただ、僅差の勝利とは運の差であるとも言える上、その細かいエピソードと今回の性転換の騒動がつながるとは、香里にはどうしても思えなかった。

「父さん、話が見えないんだけど」

「何を謙遜するか、香里よ。美坂家の跡取りとして、倉田家のお嬢さんを嫁にもらおうとは、なんたる殊勝な心がけ。父さんは、父さんは、こんな子を持って、とっても幸せぞぉっ！」

美坂父の、壮大なボケ。つつこみを入れると立場が悪くなりそうなので、とりあえず、そっちは無視することにした。

「香里」

「母さん」

「母さんは、許しませんからね！」

「なりたくてなったんじゃ」

「嘘おっしやい！ どうして、先に言ってくれなかったの」

「だから」

「止めることも、応援することもできたのに……」

なんでそうなるのよ とつつこみたかったが、声も出ない。母も、考えの根本は一緒らしい。さすが夫婦。

「とりあえず、先にお風呂に入ってくるわ。説明はあとで！」

そう言って、香里は逃げるように浴室へと向かった。どうせ自室に着替えはないのだから、戻るだけ無駄といえよう。

自宅の浴室。すべてが普段通りだから、唯一普段通りではない自分の身体にもゆっくり対処できる。普段通りシャワーを浴びて体を温めながら、普段通りにシャンプーで頭を洗い、リンスで髪を守る。

「香里」

父の声に、香里が反応する。

「父さんの、まだ使っていない新品の下着を出しておくから、使いなさい」

「ありがとう」

父は、香里が用意周到に性転換した訳ではないことくらい、分かっていたようだった。そして、日本語を崩してまで、新品の下着というところを強調する。その理解と心遣いが、少しだけ嬉しかった。

「それと、倉田のお嬢さんといい仲になれるように、頑張りなさい」

「まだ言ってるの」

足音が遠ざかる。香里は、いつもより少しだけ死角の少ない身体を洗いながら、父の背中に感謝した。

シャワーからあがり、服を身につける。男の下着。いわゆる、「トランクス」というやつ。見た目、ほとんどショートパンツと変わらない。だから、短パンとかスカートをはいてる男って、居ないんだ。そんなことを考えながら、その下着を身につける。そして、次の服。

「.....そっか。ブラ、いらないんだっけ.....」

今更ながら意識するが、今の自分の胸には、昨日まであったふくらみがない。

「.....女と男って、ずいぶん違うものね.....」

父が用意してくれたシャツとGパンを簡単に着ると、それだけで様になる。

「髪の毛、どうやって整えればいいのかしら.....とりあえず、後ろでまとめてみて.....」

十分である。今までと違い、全くメイクもしないで、服も適当に選んだもので、ある程度見られるようなできになる。

「男って、楽ね.....しかも、これで『外見を気にしない』なんて人もいるんでしょ.....絶対、人生損してるわよ.....」

ぶつくさつぶやきながら、香里はダイニングへと足を運んだ。

「あら、香里。似合ってるじゃない」

母が、香里に声を掛ける。

「ありがとう。でも、ほとんど時間がかかってないのよね.....」

「男の人って、そんなものでしょう？」

「そう？ 15分くらいしか使ってないけど」

「だんだん、香里も慣れてくるわよ」

「それは嫌」

「ご飯はどうする？」

「食べてきた」

「それなら、あれは明日の朝食ね」

香里が台所を見ると、いつもの量の夕食が、残されていた。少しだけ、申し訳ない気分になる。

「そうするわ」

香里はそそくさと、自室に引きこもった。

2 二日目 ジャム・テクノロジー

2.1

朝。

香里の目覚めは、悪い。

「.....やっぱり、男のまま.....」

部屋の合わせ鏡の前の、どこから見ても男の体型の自分に、香里はショックと混乱を隠せない。着るものは父の分があるから、とりあえずは生活には困らない。それでも、目覚めた次の瞬間に性転換してしまったという事実を合わせ鏡で突きつけられるのは、大きな精神的ショックであった。

昨日から残された夕食をレンジで温めなおしてから食卓につくと、いつのまにか母が隣に座っていた。父はまだ寝ているのだろう。菜がないのが少し気になる。

「菜なら相沢君の家よ」

「相沢君とデートかしら？」
「そういうこと」
「栞、不憫ね」
「どうして？」
「今、相沢君は女の子になってます」
「あらあら。残念ね〜」

いつものことだが、母の対応が冗談なのか本気なのか分からない。そんなつかみどころのない会話を交わしながら、香里は食事を続けた。

「ごちそうさま」
「お粗末様でした」
「レンジで温めなおしたのに、いつもどおりおいしかったわ」
「ふふっ、やっぱり、そう言うところ、私の娘よ」

娘、と言う言葉を聞いてほっとする。まだ、自分は完全に男になったわけではない。女としてのよりどころも、残っている。香里は、少しだけ安心した。

「ところで、今日は倉田さんとデート？」
「そんなこと言う人、嫌いです」
「駄目よ、栞のまねしたって。香里は今、男の子なんだから、もっとしゃきっとしないと」
「……」

この人には、何を言っても無駄。改めてそう直感した香里だった。

「でも、一弥君^{かずや}さえ生きていれば、香里が男の子になる必要もなかったのね」
「え？」

突然母の口から出てきた名前に、香里は聞き覚えがなかった。どんな人間なんだろう？

「倉田一弥君、香里は知らないかな？」

いたずらっぽく笑うと、

「うまく話を持っていけば、栞が教えてくれるんじゃない？」

といて、母はいたずらっぽく、秘密、とサインを送った。

「じゃ、いってきます」

「いってらっしゃい、明日の学校には遅れないようにね」

完全な放任。昨日までと、全く違う扱い。

(いいのか、うちの親、こんなんですか？)

そう、思いたくなくても思ってしまう香里だった。

2.2

「さて、名雪のところに行かなくっちゃね……って、あれは？」

香里の視線の先には、公園の噴水を見ながら、ベンチに座って暗い表情を浮かべている栞の姿があった。

「栞、どうしたのよ？」

香里は、妹の落ち込んだ姿を確認し、駆け寄る。

「祐一さんに……ふられちゃいました」

栞は、落ち込んだままそう言う。

「根拠は？」

香里は、栞をなぐさめるわけでも、不幸をもてあそぶわけでもなく、単純にこう聞いた。その質問に、栞は何か言葉を振り絞る。

「今朝、祐一さんの家に行ったんです。そうしたら、秋子さんが出てきて、『祐一さんは、今はあなたに絶対に会いたくないって言ってるから、ごめんね』って……」

「当然ね」

栞の泣きながらの答えを、香里は一刀両断する。もちろん、これからフォローが入る。

「理由を言う前に、ひとつ聞いておこうかしら」

「……なんですか？」

「あなたの目には、あたしはどう映ってる？」

「美坂香里……私のお姉ちゃんです。でも、今は男の人です」

「そのとおり、良くできました。そういうことだから」

「え……まさか……祐一さんが、女の人に？」

「そう。良くできました」

そう言って香里は、ジャンパーのポケットをあさる。封筒をひとつ取り出す。

「進呈」

「お姉ちゃん、キャラが違います」

「大丈夫よ、中身はお米券じゃなくて図書券だから」

論点がずれる。このあたり、名雪の影響かも知れない。なんて、ちょっと不謹慎なことを考えながら、香里は栞の反応を待つ。

「でも……祐一さんが女性って……そんなことって……」

「実際にあったんだから、しょうがないわよ」

「そうですね……なんだ、嫌われたって言うのは、私の勘違いだったんだ。ほっとしました」

ほっとしてどうするのよ。香里はのどにでかかったその言葉を、辛うじて飲み込む。

「ほっとしたところで……お姉ちゃん、今、男の人なんですよ」

「そうだけど」

「お兄ちゃん、って呼んでもいいですか？」

「え？」

「男の人に『お姉ちゃん』は不自然です。それに、私、本当はお兄ちゃんが欲しかったんです」

「……？」

香里が、不思議な表情を浮かべる。お姉ちゃんっ子の栞が、「本当は、お兄ちゃんが欲しかった」と言うとは思わなかったからだ。

「そっか……お姉ちゃんは知らないんだ。じゃあ、ちょっとお時間もらいますね」

「いくらでも」

そして、栞が説明モードに入る。

昔、栞が子供の頃。彼女は、ある男の子とよく遊んでいた。その男の子には、とってもきれいなお姉さんがいた。お姉さんは、その男の子にとっても厳しく接していて、その様子は栞の目にも恐ろしく映った。

ある日、二人が公園に遊びに行ったとき、楽しそうに遊んでる兄弟を見かける。そのとき、男の子は誰にともなくつぶやいた。

「お兄ちゃんが欲しかったな……」

栞は、男の子に伝えたかった。お姉ちゃんだって、一緒に遊んでくれる。お兄ちゃんである必要はない。でも、そのことを伝えることは、なかった。そのときの栞は、男の子のお姉ちゃんのことを聞いてしまっていたから。栞は女の子だから、事情が違う。そんなことを数年間ためらっていたら、いつの間にか男の子はいなくなっていて、風の便りに男の子が亡くなったという話が流れてきた。結局、栞は伝えることができなかった。

「お姉ちゃんもだって、仲良くなれるんだよ」

そんな言葉さえ、伝えることができなくて。

だから、香里に拒絶されたショックは2倍だった。だから、香里に受け入れられたときの喜びは3倍だった。

それは、栞は男の子の分まで、全力で人生を生きるという決意に他ならなかった。仕事をして、恋をして、結婚して、子供を育てて。与えられた機会は、全力で全うする。それが、唯一栞にできることだから。

「その男の子のこと、好きだったのね」

香里の感想は、栞に喜びと恥ずかしさを自覚させた反面、少しだけ栞を後ろめたい気分にさせた。

「いい女には過去があるものよ」

栞の表情を呼んだ香里が笑う。

「もしかして……倉田一弥君？」

一瞬だけ、栞の表情が変わる。その表情を見て、香里が少しだけ笑う。

「いいわよ、お兄ちゃんでも」

「え？」

「あたしが、男の間だけならね。それと……男になっても、この口調を変えるつもりはないけど」

「うん……お兄ちゃん、大好き」

言葉とともに、栞は香里に抱きついた。

2.3

「……で、何で二人してここに居るんだ？」

起きたばかり、着替えのひとつもしていない祐一が、自室で客人と家主を見てつぶやく。

栞の伝言を受けて水瀬家へとたどり着いた香里は、家主である秋子にこの部屋へ通されたことを説明する。

「伝言は、『また、格好いい祐一さんに会いたいです』だそうよ」

しかしそれは主題ではない。香里はひとこと言うと、秋子に目配せをする。

「女の子の身だしなみは、いろいろあるんですよ、祐一さん」

秋子の言葉に、香里が頷く。

「名雪を見ていると、そんなにいろいろあるようにはどうも思えないのですが」

祐一の反論も、

「名雪は素材が良すぎるのよ。普通に身だしなみを整えれば、そこら辺のモデルなんかよりよっぽど綺麗になるわよ」

にべもない。

「あれが、そんなに美人なのか？」

祐一の言葉に、

「相沢君も、負けにくいくらいにはならないとね」

というありがたいお言葉が帰ってくる。

「どうせすぐに戻るんだから、いらないです」

「100%成功するとも、失敗したときに再チャレンジできるとも、決まったわけではありませんよ」

これは秋子の言葉。科学的に当たり前の事実も、こうやって突きつけられると絶望的な言葉に変わる。

「まぢっすか」

「それに、女の子とつきあってるんですから、覚えていても損はありませんよ」

毎日数十分もかかる、男では考えられない大げさな身だしなみ。その講習にはどれほどの時間がかかるのだろうか。祐一は怖いことを考えながら、

「まあ、毎日やれといわれなければそれで結構なんです」

折れた。

「まずは、顔の洗い方からね」

「石鹸で適当にこすってから、冷水ですすぐだけだろ？」

香里の出鼻をくじこうと試みた祐一。しかし、まるでテンプレートのような香里からの返事。

「女の子はね、専用の洗剤を使って、細かい部分まで、非の打ち所のないように綺麗にしなきゃいけないのよ」

「そうです。さて、顔の洗い方ですけど」

秋子の細かい指導。その細かさに、香里も少し、驚いている。もちろん、おおざっぱなことしか分からない祐一が、覚えきれぬはずもなく。

「分かりましたか？」

「あとでマニュアル下さい」

という始末。

その後も、下着の付け方から、服の選び方、しわが目立たない着こなし方、イメージ別の服の色の選び方……その間、おおよそ3時間。

「これを毎日30分くらいでこなせば上等かしらね」

香里の一言でかいま見た女の子の世界に、絶望を覚えた祐一だった。

2.4

さて、すっかりかわいい女の子としての見た目が整ってしまった祐一だが、もちろん、これも主題ではない。

ドレスアップされた祐一とドレスアップした2人は、リビングに降りる。秋子は、鞆からノートパソコンを取りだし、セットアップをする。それが終わると、次は棚から奇妙な回路と、突起のあるシートを取り出した。回路をRS-232C接続でノートパソコンにつなぐ。シートと回路を見たことのないコネクタで接続して、システムに電源を入れる。

「さて、お昼にしましょうか」

「……へ？」

祐一と香里の目が点になった。

ふと祐一はあたりを見渡す。トースターが、なぜか生きている。お湯はポットに十分ありそうだ。普段の秋子であれば、さっさと片づけているに違いない。つまり、狙ってこの状況を作り出したということになる。

「どういうことですか？」

このコンピュータは、性転換の原因を調査するものじゃなかったのか？祐一の問いに、秋子はにっこりと笑って答える。

「仕掛けはこれです」

秋子は、台所からオレンジ色のジャムと、金属の粉を取りだして、祐一と香里の目の前で混ぜた。

「新作のオレンジマーマレードです、ご賞味あれ」

「その金属の粉がキーワードなんですね」

香里の言葉に、秋子が頷く。もちろん、香里だって、あの『オレンジ色のジャム』の味を忘れたわけではない。しかし、金属粉末を摂取することが謎を解くキーワードならば、食するしかない。

(祐一さんも香里ちゃんも、ずいぶん顔が青いわね)

秋子はトースターに食パンをセットすると、紅茶の葉を3人ぶん、急須の中へと放り込んだ。その表情には、幾分訝しげなものを漂わせている。

(あの『甘くないジャム』を連想しているのよね……そんなのひどい味だったかしら?)

祐一と香里の考えていることは、まるっとすりっごりっとお見通しだった。

それから、祐一の遅めの朝食と、香里の早めの昼食が始まった。

「甘くなくて、おいしいですね」

香里の感想に、秋子は満足げに頷く。

「ええ、オレンジマーマレードだけでもおいしいんですけど、ナノマシーンを入れると、酸味が引き立ちますから」

どうやら、金属粉末はナノマシーン（超ミニサイズのロボット）だったらしい。祐一と香里は、甘くないジャムの通称『謎ジャム』に引っかけて、『ナノジャム』と銘々した。ちなみに、このナノジャムは、秋子の手によってすでに学会に発表されていて、実用化のためのコスト削減を研究中という。

「そう言えば、何で、あの甘くないジャムはあんなに受けないんですかね」

その一言に、2人の背筋は凍る。

「ちょっと人を選ぶ味かな、とは思ったんですが、誰もおいしいって言ってくれないんですよね」

沈む雰囲気。2人は、秋子さんと視線を合わせないようにして、そそくさと自分のジャムを平らげていった。

食事（？）が終わってから30分ほど休んで。

「それでは、これからナノマシーンに信号を送りますので、ちょっとくすぐったいんですけど我慢してくださいね。あ、香里ちゃんはペースメーカーとか大丈夫？」

「問題ないです」

「それでは、始めましょう」

秋子が、ノートパソコンのキーボードをたたく。そして、小さな突起の付いたシートを、祐一に向ける。

「これは……？」

「ナノマシーンとの通信用アンテナです。さわらないでくださいね」

「はあ……」

秋子の言葉に従い、祐一はただじっとしている。

香里も、同じように。

そうして、およそ2時間が過ぎた。

「あとは、計算が終わるのを待つだけです」

秋子の宣言に、2人は安堵する。

「ナノマシーンはどうなるのでしょうか？」

「もう、ただのミネラルです。寿命が、2時間くらいしかないんですよ」

その言葉に、安堵感を覚える2人。

「個人用計算機だと、やっぱり計算遅いですね」

目の前にあるノートパソコンは、当時の最新型の最上位機種である。それにも関わらず、それを「遅い」と断定する秋子。

（未恐ろしい人だ……）

「？」

祐一は直感でそう感じたが、コンピューターの知識がない香里には、そのあたりがさっぱり分からない。

「サーバーに送った方が早かったかしらね。でも、送信データが多いのも考え物ですし……」

2004年現在、ADSLの普及によって大容量データのネットワーク送信は一般的になりつつあるが、1999年春の時点ではまだ、モデムによる電話回線が主流だった。ある会社の悪名高きADSLたたき売り戦略によってADSLの技術が一般化するのとは、このエピソードから一年以上経った後の話である。

「気長に待ってるから、大丈夫です」

祐一と香里は、その言葉通り、待つことしかできない。

3人で雑談をしていると、いつの間にか日が傾き、

「ただいま～」

名雪の声が聞こえた。

2.5

「おかえりなさい、名雪」

秋子の言葉に反応して、名雪がリビングに行くのと、見知らぬ男女が座っていた。

「……誰？」

名雪が思わず漏らした言葉に、その男女は呆れたような表情を浮かべた。

「香里の手紙、読んでないのか？」

女の子が、名雪に冷たい視線を投げかける。

「手紙？」

(表1)の手紙を名雪は思い出す。香里が男の子になって、祐一が女の子になったという、世にもばかげた内容。その手紙を思い出しながら見ると、女の子は確かに祐一に似ている。男の子を見ると、顔は確かに香里そっくりだ。

「まさか……」

「そのまさかよ」

男の子が、「ようやく分かったの？」と言いたげに、ため息をつく。

「この手紙……本当だったんだ……」

「嘘なら、もっとホントらしいことを書くだろ」

女の子 相沢祐一 が、冷たい言葉を投げかける。

「今度は、名雪に何をおごってもらおうかしら？」

男の子 美坂香里 が、してやったりといった表情でつぶやく。

「うう……ごめんね……」

名雪が、2人に謝る。

「ま、何も考えずにひよこひよこついていくよりはましか」

祐一は、最悪の事態を考慮していた名雪を、少しだけ評価した。

「晩ご飯は、どうします？」

秋子が聞く。

「準備も大変でしょうし、どこかに食いにいきませんか？」

祐一が答える。

「それでは行きましょう、香里ちゃんもね」

「いえ、ちょっとお金が……」

ばつが悪そうに香里は答える。それもそのはず、昨日のコーヒー代は高校生にはかなりの痛手だった。

「今日は、この秋子お姉さんに任せてください」

「え、でも、悪いです」

「いいものを見せてもらいましたから」

そう言って、秋子は名雪に視線を移す。秋子の視線につられて、香里が名雪に視線を移す。その名雪は、香里と視線があったことで顔を赤らめる。

「名雪、熱でもあるの？」

不安を振り払うかのように香里が問うと、

「香里……男の子になってみると、すごくカッコイイよ……」

と、名雪の返事。

「はあ……」

不安が倍加して的中した香里は、深いため息をついた。自分が男になったことに対して、拒否を示してくれる人間がいない。両親も、妹も、あまつさえ、親友さえも。

「早く、女に戻りたい……」

そのつぶやきの答えは、近い未来、目の前の平べったい計算機によって導き出されるであろう。

「大丈夫よ」

戻る方法に確信があるのか、それとも、「男のままで大丈夫」と言いたいのか、秋子が香里に言う。

「さあ、行きましょう」

秋子の声で、4人は食事に出かけることになった。

2.6

「よりによって、ここですか」

祐一が、秋子につぶやく。今日は、定食屋にファーストフード店、両方とも混んでいたのだ。町は確かに発展しているのだが、喫茶店の食事がどこもおいしいという評判が逆に、ファミリーレストランなどのお食事処の進出を拒んでいる。

そして、水瀬親子が選んだ喫茶店は、百花屋だった。

「カッコイイ香里と、可愛い祐一に囲まれて、いちごサンデーが食べられるの～ 幸せだよ～」

「そんな幸せは享受しないで」

浮かれている名雪につっこむ香里。その表情は芳しくない。そんなやりとりを見ている秋子は、その様子を見て、傍目からでも分かるほど浮かれていた。

店内に入ると、店員の案内で4人席に誘導される。渡されたメニューを眺めながら、少しずつ

「えっと……ブレンドコーヒーとパンケーキ、あとはポテトサラダを」

まずは祐一の注文。

「はい、パンケーキのシロップが、メープルとストロベリーがありますが」

「メープルで」

「かしこまりました」

「わたしは、いちごサンデーとパンケーキのストロベリーシロップと、いちご100%ジュースでお願いします」

次は、名雪。

「いちごサンデーの方ですが、当店の通常メニューのストロベリーサンデーと、今日から期間限定販売の、ミラクルサンデーの2種類ございますが」

「ミラクルサンデーをお願いします」

即答。

「かしこまりました」

「あたしは、パンケーキ2皿をメープルで」

香里の注文はシンプルだった。

「かしこまりました。最後のお客様、お決まりですか？」

「はい、ジャンボミックスパフェデラックスをお願いします」

最後の、秋子さんの注文に、あたりが凍り付く。

「……かしこまりました、えっと……ミラクルサンデーをご注文のお客様」

「はい？」

「デザートの方は、お食事と一緒にいただきますか？ それとも、食後にいただきますか？」

「一緒をお願いします」

「かしこまりました。ご注文をくり返させていただきます……」

何とか、無事に注文を取り終わった4人だった。

「たびたび申し訳ございません、ジャンボミックスパフェラックスをご注文のお客様」
テーブルに、店長らしき人がでてくる。

「お客様、ジャンボミックスパフェラックスには、こちらのチャレンジコースもついてきますが、いかがなさいますか？」

そう言って、提示されたのは、お値段+100円で、全く同じものが出てくるコース。これを、30分以内に食べ終われば、無料になるらしい。

「ちなみに、現在のところ、達成者は0ですが……」

「了承」

チャレンジコースを受けて立つ秋子。

「かしこまりました、ありがとうございます」

それから、およそ35分の後。

「水瀬秋子様、ジャンボミックスパフェラックス・チャレンジコース、ご完食です！」

百花屋の、現在働いている店員全てが出てきて、拍手を送る。こうして、水瀬秋子にまつわる伝説が、またひとつ増えた。

「両手に花～」

帰り道、名雪は、右手に祐一、左手に香里を携え、赤い顔でハイテンションになっていた。おそらく、この2人を眺めながら、期間限定いちごサンデーを食べたことも、引き金だろう。

「なんで両手に花なんだ？」

「だって、右手が祐一で、左手がカッコイイ男の子なんだよ～、ね、香里」

「それはやめて」

その、「左手のカッコイイ男の子」が、拒否反応を示す。

「とりあえず、その論法なら、『女の子3人が横1列で歩いてる』でも、問題はないけどな」

祐一が、ふとつぶやく。

「あら、だったら『女の子4人』っていうのはどうですか？」

そう言って、秋子が祐一の右手に抱きつく。

「あら、だったら『女の子5人』っていうのはどうですか？」

そう言って、栞が香里の左手に抱きつく。

「栞!？」

香里が栞の登場に驚く。

「さっき、秋子さんがあれを完食したときに、百花屋の前を通り過ぎたんです」

そう言うと、栞は列を離れ、祐一の目の前に。

「祐一さん、会いたくないって言われてたけど、会いに来ちゃいました」

栞は祐一にそう言うと、一拍置いて次の言葉を紡ぐ。

「祐一さん、悔しくなるくらい可愛いですよ」

「……」

全然嬉しくなかった。

「私は、このままでも、祐一さんの恋人で居続けたいです」

「……栞」

「はい？」

「名雪と秋子さんと香里がいる中で、よくそんな恥ずかしいことが言えるな」

「大丈夫です、むしろ聞かせたいですから」

「……」

のろけるんじゃないわよ。香里の視線が栞に言っているが、もちろん栞は気にする様子もない。

「祐一さん、私、明日も明後日も、会いに行っていていいですか？」

「ああ、かまわないぞ。ばれたものは仕方ないしな」

「ふふっ、それではまた明日」

そう言って、菜は祐一たちの進行方向とは逆方向に、駆け足で去っていく。その姿が見えなくなった頃。

「なあ、香里。さっきの菜、なんか獣じみたものを感じたんだが」

「いいことを教えてあげる。あの子、両刀よ」

「……」

香里にぶつけた質問に、予想通りの答えが返ってきて沈黙する祐一。今日中に、戻れなければ大変なことになる。そう直感し、背筋が震えるのが分かる、祐一だった。

2.7

YBM 社ノートパソコン、ThinkKey。彼は、RS-232C から入力された、2 時間にわたる計測データを解析しつづけていた。時間応答曲線、ボード線図、ナイキスト軌跡など、さまざまな座標系のグラフを計算する。彼のパートナーである Canan のプリンターは、そのインクジェットの中で、彼の計算したグラフを、白いプリント用紙に思い通りに描く。プリント用紙にグラフが描かれたことを確認して、彼は次のグラフの計算を始める。ノートパソコンとプリンタの絶妙なコンビネーションは、真っ暗な無人のリビングで最高の芸術だった。

「ただいま～」

ご主人様の娘の声。彼女に「おかえり」の挨拶を返し、一緒にいるはずのご主人様に計算完了の合図をするため、彼はひときわ大きい声を発した。

ピーッ。

「あら、ちょうど計算が終わったようね」

ノートパソコンの声を聞いて、秋子が満足そうに頷く。

「ではデータを覗いてみましょう」

余裕を持った表情で、秋子はプリンターへ近づく。十数枚にわたる用紙を手にとって、その中の 1 枚をじっくりと見る。

「祐一さん、私の部屋から『Case study for advanced Frequency Analysis』という本を取ってきていただいていたんですか？」

「はい、ちょっと待っててください」

祐一が、秋子の部屋に向けて一步を踏み出す……ことはできなかった。

「……うぐう、あゆあゆじゃないもん……」

祐一は転んでいた。名雪と香里が、呆れた表情で祐一を見る。その視線に耐えかねたのか、祐一は逃げるようにして秋子の部屋へと駆け込む。

「体のバランスの問題かな？」

名雪の言葉に、秋子が頷いた。

祐一の持ってきた洋書の目次を見た秋子は、ぱらぱらと数ページめくって、手元のグラフとつきあわせて見ていた。

「困ったわね」

秋子がつぶやく。普通のシステム解析では、絶対に出ないような応答曲線なのだという。応答曲線とやらが何なのかはよく分からないが、普通ではない状況というのが、秋子の口調からはっきりと確認できる。

「やっぱり、結論はこれしかないかしら」

もう一つつぶやいてから、秋子はリビングで固唾をのんで見守る 3 人に告げる。

「どうやら、魔法の力が原因のようね」

ばかげた結論だ。その言葉を聞いた 3 人が浮かべた表情に、秋子は仕方ないと言った表情で返す。

「ええ、祐一さんに持ってきてもらったこの本で確信しました。あの周波数のグラフは、この世には絶対にあり得ない反応を示しているから」

秋子は一息ついて続ける。

「物理法則を完全に無視した芸当、それが証明されてなおかつ現存している、これは、魔法としか言えません。」

3人の視線が秋子に集中する。

「さて、この世界には魔法を使えると噂されている人物が何人かいます」

たとえば、と前置きをして秋子が名前を挙げた3人の人物は、すべて祐一に聞き覚えのある人物だった。

分身魔法に惑わされた超能力少女、川澄舞。

生命を代償に願いを叶えた少女、月宮あゆ。

古の魔法を伝える一族の末裔、倉田佐祐理。

封印した二つの冬と現在が、魔法というキーワードで強制的に共鳴する。祐一は少し顔をしかめたが、平然を装った。

「さて、あゆちゃんの魔法は既に残っていないことは明らかだと思います」

秋子の宣言を、全員が受け入れる。7年間植物状態だったあゆが魔法を使えるわけではないし、意識的にしろ無意識的にしろ、香里を男性化する理由がない。

「じゃあ、川澄舞？」

名雪が聞く。舞の学校での評判はすこぶる悪く、全生徒で彼女とまともに雑談をするのは、倉田佐祐理だけだという。そして、事件のあったそのとき、川澄舞はあの場所にいた。容疑者としては十分といえる。

「それも当たる必要はあるけれど、倉田先輩の可能性はどうなのかしら？」

香里の一言に秋子が頷く。

「私は倉田さんが本命だと考えています。性転換を引き起こせるような状況は、研究の思いがけない副作用でもなければ、代々洗練されながら引き継がれる古代魔法くらいしか考えられません」

自分の分身に人生を引っかき回されているようでは、このような大がかりで洗練された魔法は扱えない。秋子はそう断言した。

人生といえば。

香里がそう前置きして、倉田一弥の名前を出す。佐祐理の弟にして、生前は栞とよく遊んでいた少年。彼も倉田家に受け継がれる魔法を修得していたとするならば、時限的な仕掛けを施すことはできたのではないか。

香里の主張はしかし、秋子によって否定された。さすがに小さな少年では修得は難しい、とのことである。

3 三日目 真実と虚実

3.1

翌日。

「朝～、朝だよ～、朝ご飯食べて学校行くよ～」

いつもの時間より、30分ほど早い。“女の子の身だしなみ”。祐一は、どれだけ時間がかかるかわからないこの作業のために、多少の早起きをせざるを得なかった。

「……」

その前に制服を準備しなければならないが、自分の制服が、なかった。代わりにかかっていたのは、名雪の制服より少し大きい、女子用の制服。そして、その近くには、きっちり女性用下着が置いてある。

「これを着ろ、と」

秋子さんのことだ。何か、策があるに違いない。そう思い、祐一は身だしなみを整えるため、洗面所へ向かった。

「さて、どういう髪型にするか……」

鏡の前で、祐一が自分の顔を覗き込む。そこで、自分の顔が名雪と似ていることに気がついた。

性格がまるで違うため、同じ表情をすることはまずない。その従兄弟に、顔が似ている。ならば。

「とりあえず、手っ取り早く、名雪みたいな髪型だな」

そう決めると、行動は早かった。洗顔料で顔を洗うのに、5分。髪型を整えるのに、10分。合計15分。首から上は、これで完璧に整った。

服を着る。昨日、習ったとおりに、まずは、ショーツをはく。これは、問題なし。次に、ブラを付ける。

「まず、肩ひもに腕を通して、カップ下をアンダーバスト部分に……と」

ステップを踏んで、ゆっくりと付けていく。

「上半身を前にたおし、バストがカップの中に入っているか確かめる……OK」

秋子からもらった Web 上のマニュアルを暗唱しながら思い出す。

「で、後ろのホックをとめるんだよな……きつっ」

後ろに回した手が、つりそうになる。数回ミスをしたが、無事にホックが留まる。

「片手でブラのアンダーを押さえながら、もう一方の手でバストがカップに完全に入るよう整える」

胸を、ブラに入れる。……ぷにぷにして、さわり心地は結構気持ちがいい。

「……ま、栞は発展途上だし」

ふと、自分の恋人のことを考える祐一。その言葉を栞に聞かれたら、祐一は大変なことになるだろう。

「ストラップ調節……前は上げ気味、後は低めに」

……。

…。

何とか、ブラを付け終わった。

「ブラって、結構フィットするんだ……」

自分の付けた下着に、全く違和感がないことに驚く。あとで秋子に聞いたところ、マニュアルに沿って着脱をしたからだということだった。マニュアルに沿わない方法でブラの着脱をし、胸を圧迫し、あまつさえ胸が小さく見えてしまう人が多いのは残念なことだと秋子はつぶやいた。

ブラウスを着て、次は制服。ベースのワンピースは問題なく着ることができたが、やっかいだったのがリボン。右や左に試行錯誤するものの、結局、リボンを結ぶことができず、寝ばけた名雪に結んでもらう始末。

祐一の女の子3日目は、こうやって幕を開けた。

3.2

ところ変わって、ここは私立カノン学園。

北川が教室にはいると、彼の密かなお気に入り・美坂香里の席に、見知らぬ男子生徒が座っていた。長い髪の毛が、香里のウェーブがかかった髪を想像させるが、後ろに束ねているため、その美しさはみずばらしいものに見える。顔は、香里にそっくりである。ただ、若干目つきが鋭く、死んだ魚のような目をしている。服装は普通に男子生徒の制服。ただ、本人の背格好より若干大きいものを着ているのか、裾が多少あまっている。

北川は、その男の隣 自分の席に座る。

「おはよう」

とりあえず、隣の男に挨拶をしておく。

「あ、おはよ……北川君、いつの間に来てたんだ……」

話し方も美坂と同じ。美坂が男になったと考えれば、つじつまが合う。しかし、そんな非科学的なことが、つじつまが合うからと言って、納得していいのだろうか？

隣で鬱になっている男を横目に、北川はひとりそんなことを考えていた。

そして、授業まであと3分。水瀬さんと相沢がやってくる頃だ。

いつもの足音、いつものドアの開閉音。そして、俺と相沢のバカトークが始まる。

簡単な挨拶の後、石橋は席を立つ。

「あ、そうだ……相沢、北川」

「「はい？」」

「しばらく、席代わっとけよ。以上」

そう言い残すと、いつもどおり石橋は教室を去る。教室には、いつもどおりの喧噪が広がるわけではなく、いつもと雰囲気の違う祐一と香里の方に視線が集中する。そして、クラス全員が信じられないと言った表情をするのだ。それもそうだろう。今の2人は、普段と、性別が違っているのだから。授業が始まるまで、彼ら2人は、クラス中の生徒の好奇心の視線に突き刺されてまともに身動きがとれないままだった。

3.3

さて、しばらく時間を巻き戻してみよう。朝の職員会議が始まる20分ほど前。

「石橋先生、ちょっといいですか？ うちの倉田が、先生にお話があると……」

石橋は、同僚の言葉に従い、倉田佐祐理を応接室に通す。すると、

「ふえっ……佐祐理のせいで、先生のクラスの、相沢さんと美坂さんが……」

そう言って、彼女は急に泣き出した。

「……佐祐理のせいで……佐祐理のせいで……」

急に泣き出されても、意味が分からない。とりあえずお茶を出して、気分を落ち着かせる。そして、沈んだまとはいえ、多少落ち着いた佐祐理から聞いた話は、その場にいた教師全員にとって驚くべき話だった。

佐祐理の話を要約するとこうなる。

文化祭一日目、クイズ研究会恒例のクイズ大会に佐祐理は出席した。去年・一昨年と、2年連続優勝の経験がある佐祐理は、前人未踏の3年連続優勝に挑戦しようとして、その大会に3たび参加した。

その大会で佐祐理に土を付けたのが、祐一と香里。負けた悔しさで、佐祐理はろくに挨拶もせずに逃げ出してしまった。

翌日は文化祭の片づけなので、終わった後にお詫びをしようとして、佐祐理は祐一たちにお手製の弁当をごちそうしたという。これは佐祐理が誰かに何かを謝ったり、ものを頼んだりするときの常套手段である。もちろん、他に1～2人くらい来てもいいように、お弁当は多めに作るのがたしなみ。

しかし、クイズ大会の件は、ふたりともよく覚えていないようだった。そのため、謝罪は後回しにして、食事だけ一緒した。

しかし、その食事が問題だった。

均一に作ったはずの食事に毒が含まれていたようで、その毒が原因なのか、祐一と香里の性別が変化してしまった。ただし、同じものを食べていた舞・佐祐理・名雪の3人は全くの無事だった。

佐祐理は昨日さんざん悩んだあげく、以上の事実を石橋に告げることに決めた。

「倉田さん、よく言ってくれた。あとは、我々教師陣に任せてくれ」

石橋の一言に、佐祐理も少し元気を取り戻した。そして、周りの教師陣に礼を言うと、佐祐理は落ち着いた様子で教室に戻っていった。

とりあえず、事実確認だけをする。石橋は、表情が変わらないようにホームルームへと向かった。そして、佐祐理の証言の、非科学的な最終結果だけは真実であることを確認した。

3.4

恋はいつだって唐突だ。今回の国語のテストは、この一文から始まった。その問題を作った教師、沢渡真琴。この学校の、7年前の卒業生。

(なんで、うちの居候だった女と同じ名前なんだろう)

祐一は、自分の身体が女性化しているという事実をできるだけ考えないように、どうでもいい思考で自分を支配した。

次の時間は数学。テストの簡単な解説をする石橋の声は、香里の左の耳に入ってすぐに右の耳へ抜けていく。

(どうしたら、現在の状況から抜け出し、元に戻るのかが問題ね)

香里は、自分の身体が男性化している異常事態に対処する方法を練りながら、事件を調査できる昼休みを待ちこがれていた。

そして、昼休み。

一般の生徒たちは、お弁当を広げたり、学食へ向かったりする準備を整える。しかし、祐一と香里にはそれが許されなかった。

「相沢、美坂、ちょっと良いか？」

石橋の言葉に、2人が反応する。

「ちょっと、込み入った話につきあって欲しくてな。放課後になったら飯おごるから、ちょっと時間くれ」

「分かりました、先生。めいっばいお相手差し上げます」

石橋の言葉に、即座に反応する香里。普段であれば、淑女的な微笑みというのであろうか、そう言う感じの表情を見せて返事をする。が、現在の姿では、ただの軟弱な青年にしか見えないのが残念だ。

「香里？」

「いいから、相沢君もついてきなさい」

そして、2人は石橋の用事につきあうことになった。

同じ頃、卒業式のリハーサルを終えた3年生の教室。

「……佐祐理、ちょっと出かけてくる」

川澄舞が、倉田佐祐理に告げた。

川澄舞。夜中にガラスを割るなど多少行動に問題はあったものの、成績はきわめて優秀な少女。自宅謹慎も関係なく、学年でトップテンの地位を守ったまま、明日、卒業する。

そんな彼女が、今、一番心配していること。目の前で長い時間苦しみ、性別が変わってしまった2人。確か、美坂香里と相沢祐一といったか。

次の日は休みだったため、今日が、初めての調査のはず。ならば、佐祐理を守るため、彼らにこう伝えなければならぬ。『佐祐理のお弁当は、2人の性転換の原因ではない』と。

「ふえ？ 舞、どうしたの？」

それが不思議だったのか、気の抜けた返事をする佐祐理。かなり前から、今日、半日授業の放課後を、舞は楽しみに待っていたはずなのだ。

「ちょっと込み入った話。佐祐理は先に帰って」

「舞がそう言うなら……分かった、また明日ね」

「明日じゃない。話が終わったら、佐祐理の家に行く」

「うん、それじゃあね」

言葉通り、佐祐理は帰宅。そして、舞は事件現場 いつもお弁当を食べている踊り場へと歩きだした。

3.5

「 で、相沢と美坂は、ここで倉田さんのお手製弁当を食べてた、と」

昼休み、事件のあった階段の踊り場。石橋の問いかけに、2人は黙ってうなずいた。

「ここには、相沢と美坂と倉田さんだけだったのか？」

「名雪と、3年生の川澄舞先輩がいました」

祐一が石橋の問いに答える。

「じゃあ、ここに来たときから、できるだけ詳しく状況説明を頼む」

その言葉に反応して、祐一がここであった出来事を思い出しながらしゃべる。

「しかし、妙だな」

石橋は香里の状況説明に、不審な点を覚えた。用を足すと言っても、さすがに時間が長すぎる。佐祐理が離れていた時間は、客人をもてなすには不自然なほど長い。

それを指摘すると、香里は一つの問いを口にした。

「では、倉田先輩は何をしていたのでしょうか？」

「さあ、誤って混入した性転換の毒薬に対する解毒剤を取りに行ったか、あるいは彼女が犯人なら、飲ませるために性転換の毒薬を取りに行ったってところか」

「毒薬？」

石橋の言葉に、香里は不思議な点を覚える。それを指摘したところ、石橋は佐祐理の話をかいつまんで聞かせてくれた。ただし、均一に作ったはずの食事に毒が含まれていたという佐祐理の推測を、石橋は形を変えた自白だと考えている。

もちろん、佐祐理の話は秋子の分析とは全く違う物語であり、香里は佐祐理の話を、原因を隠すための ミスディレクション 誤導ととらえる。

祐一は佐祐理犯人説を疑ってかかっていた。佐祐理以前の問題として、目の前に魔法とかいう超能力を使える人間がいたのだから、そっちを疑うのが本筋ではないか。つまり、佐祐理の話はすべて本当で、魔法を用いて毒薬を持ってきた舞が本命なのではないか、と。

実際に、彼女は佐祐理が懐から取りだした薬を、祐一たちに飲ませることを拒んでいる。

「……待って」

3人で考え込んでいるときに、階下からの女生徒の声。

「……その場には、私が居合わせた」

その女生徒 川澄舞が、踊り場に姿を現した。石橋が、少しおびえたを見せる。それに対し、舞は無表情のまま。

「……佐祐理の弁護をしに来た」

舞の無表情が放つ、石橋へのプレッシャー。もちろん、それは彼女の評判を鷄呑みにしている石橋の幻想ではない。

「川澄先輩」

その評判を聞かされたことがなかったため、そんなプレッシャーをいっさい感じることはない祐一がそれに代わる。

「……ああ」

「いくつか質問させてもらう。まず、川澄先輩は、なぜあの場にいたんだ？」

「……いつものこと。佐祐理が、偶然、あなた達を連れてきた」

「つまり、先輩はいつもここでふけてて、俺達に偶然かち合った、と」

「……違う。……私と佐祐理は、毎日お弁当」

「……？」

「いつも、川澄先輩は、倉田先輩と一緒に、ここで昼食のお弁当を食べていた、ということですか？」
理解できない祐一に、香里が助け船を出す。

「……そう」

「なるほど……では、次の質問。川澄先輩は、俺達の弁当に手を付けたか？」

「……つけた」

「それは、いつだ？」

「……苦しみはじめてしばらくしてから」

「どれくらいの量だ？」

「……残り全部」

「先輩の身体に異状は？」

「……ない」

舞の言葉を信じるのであれば、お弁当に毒薬が入っていた線は消える。祐一と石橋は証言を疑ったが、香里は舞の言葉を信じた。女同士の勘というのが、現在男である香里にあるのかどうかは分からないが、その言葉は真摯なものであると感じることができた。

質問者が、祐一から香里へ。

「先輩、魔法が使えたらいいなって思ったこと、ありません？」

「……ない。使えるから」

「それでは、先輩はどんな魔法を使えるのですか？」

「……もう1人の自分を生み出す力」

祐一と香里には、その言葉にはためらいがあるように聞こえた。そのためらいから、祐一は舞の証言を疑い、香里は舞の証言の信頼した。

「では、他に誰か魔法を使える人間をご存じありませんか？」

「……佐祐理は、たぶん使える」

「倉田先輩がそれを使った可能性は？」

香里の、一番したかった質問。これで、佐祐理の犯行が立証できる。

「……ない」

「それはなぜ？」

「……完全な魔法はかけるタイミングはなかった。不完全な魔法は、佐祐理の体力が持たない」

「なるほど、ご協力ありがとうございました」

「……さよなら」

香里の言葉に合わせて、舞はその場を去った。言いたいことは全て言った。佐祐理に毒を混ぜるタイミングはなかった。佐祐理に魔法を使うタイミングはなかった。佐祐理の無実を確信しながら、舞は満足そうに佐祐理の家へと向かった。

食事をする間もないまま昼休みが終わり、午後の授業。帰ってくるテストの点数にクラス全体が一喜一憂する中、祐一は佐祐理の言葉を信じた舞の犯行説を、香里は舞の言葉を信じた佐祐理の犯行説を吟味していた。

そして、放課後。

祐一と香里は、石橋からひとつの情報を得る。3階の廊下で、佐祐理が倒れていたという話。倒れたところを見た人間はいないらしいが、倒れている佐祐理を助け起こした人がいる、ということだから間違いはない。

この事実は、2人ともが自説を補強する材料であると考えた。そして、翌日に向けて、2人は戦略を整えた。

4 四日目 名探偵と迷探偵

4.1

翌日、卒業式終了直後。

北川と名雪は、クラスメイトがふたりいなくなっていることに気がついた。祐一と香里である。担任の石橋に報告したが、しばらくすれば帰ってくるだろうと言って取り合ってはくれなかった。

いなくなった2人はどこにいるのだろう。片づける量が少しだけ多くなった代償に、何かをおごらせよう。そんなことを、残された2人は考えていた。

「奇遇ね、相沢君」

「目的は一緒だってことだろ」

片づけを抜け出した2人は、全ての仕事を終えた卒業生が別れを惜んでいる場所に、事件の犯人を探しに来ていた。

幸いというか、容疑者ふたりは一カ所に集まって写真を撮っていた。祐一は舞に、香里は佐祐理に、それぞれ声をかける。卒業生ふたりはその言葉に応じ、4人は校舎の裏庭へ移動した。

「お話って何でしょうか？」

佐祐理の言葉に、香里がゆっくりと言葉を返す。

「倉田先輩、あたしと相沢君を、元に戻していただけませんか？」

香里の言葉に、その場にいる全員が驚きの表情を見せる。

「……できるわけがない」

舞の言葉に、祐一が頷く。

「できるのはあんだろ、川澄先輩」

祐一の言葉が、あたりの空気を張りつめたものに变化させる。

「佐祐理は頭の悪いただの女の子ですから、そう思う理由を聞かせていただけませんか？」

佐祐理が祐一の主張の根拠を求める。

それに対して、祐一の推理の披露が始まる。

「まず、通常では考えられない手段で犯行が行われていることは明らかだ」

最初に、祐一は魔法の存在を示唆する。

「魔法を使える人間として、現存する人間は佐祐理さんと川澄先輩のふたりだけだ」

そして、祐一は、事件の詳細について語る。

「弁当に毒を仕掛けるのは非常に危険なことだ。なぜなら、佐祐理さんや名雪、そして川澄先輩自身に害が降りかかるおそれがあるから。

つまり、佐祐理さんと先輩自身を除外して毒を仕掛けるもっとも手っ取り早い方法は、箸の上に乗っている食材に、直接毒を仕掛けること。

名雪はすぐに場を離れたから、被害はなかった。で、佐祐理さん以外の人間を毒に引っ掛け、性転換をさせた。

万が一にも佐祐理さんに被害をかぶせないために、トイレに立った佐祐理さんを気絶させた。食べ物に仕掛けていないとはっきりさせるため、残りの全ての食品を平らげた」

ここで祐一は一息つく。

「その証拠に、川澄先輩、あなたは香里の質問に答えるときにためらった。あれは、犯行に『もうひとりの自分』を使ったからだ。もう1人の自分とやらが見えるかどうかくらいは、先輩が決められることでしょうか？」

その言葉に、舞はうなだれ、佐祐理は怒りの表情を見せる。そして、佐祐理が言葉を放つ。

「それなら、舞がやったという証拠を持ってきてください」

その言葉に、祐一はたじろぐ。ここまで用意周到な犯行に、毒薬など残すはずがないと考えていたからだ。

「持ってこれないなら、舞は犯人じゃないですよ」

反論できない祐一に、佐祐理の勝ち誇った表情が光る。反対に、舞の表情は浮かない。

「そうですね、確かに川澄先輩は犯人ではありません」

佐祐理の言葉を確実にしたのは、香里だった。

「川澄先輩、相沢君に反論をしないことで倉田先輩をかばおうとしても無駄でした」

香里の一言は、祐一と舞をもう一度驚かせた。

「もう一度言います。倉田先輩、私たちを元に戻してください」

香里の言葉に、今度は佐祐理が反論する。

「できるというなら、証拠を見せていただけませんか？」

佐祐理のこの言葉を、香里は待っていたようだった。

「その前に、事件の真相を明らかにしておきましょう。この事件を起こした犯人は、倉田先輩、あなたです」
その言葉に、佐祐理は平然と言葉を返す。

「月並みで申し訳ありませんが、犯人と断定するからには決定的な証拠があるんですよね」

香里は、もちろん、とほほえみを返す。

「……佐祐理はやってないと、昨日証明した！」

舞が反論する。

「川澄先輩、あなたの証明は、逆に、その不十分性を追求したことにより、全く反対の事柄を証明してしまったのです」

それを受けた香里の言葉は単純に意味不明の言葉だった。

「順を追って説明しましょう。」

まず、このたびに起きた事件とは、あたしと相沢君の性別が変化してしまったことです。

これが、日常的にあり得る事柄でしたら、無限の可能性を考えなければいけません。たとえば、『火事が発生する』原因は、放火、焼身自殺、ガス系の故障、火の不始末など、さまざまな理由があり、そのそれぞれについて議論を進め、すべてのルートで可能性・不可能性そして妥当性を議論し、一つの原因に絞り込まなければいけません。しかし、今回に限り、そんなことは必要ないのです。『性別が変化する』要因など、通常は存在しないのですから。

そこで、私たちは水瀬秋子さんにより、性別変化の原因を追及してもらいました。その結果は、魔法による犯行、です。

このことは、後で秋子さんに聞けば分かります」

香里は、そこで一息つく。

「この結果、私たちには容疑者として、倉田先輩と川澄先輩が浮かび上がってきました。が、ここでもう一つの可能性が生まれます。毒の入ったお弁当、です。しかし、この可能性はすぐに否定されました。私たちは魔法の力で性別変化をしたのであって、決して毒の力ではないという点です。

そして、この事実から、私はある妥当性を発見しました。それは、倉田先輩、あなたが^{ミスディレクション}誤導を誘ったと
言うことです。誤導の通りに、相沢君は毒による犯行を信じ込み、結果、川澄先輩犯人説という間違った結論を導き出しました。

もちろん、相沢君の言っていた、川澄先輩のためらいは別の意味を持ちます。魔法に惑わされた少女、と解釈するのが妥当で、この件とは全く関係ないことが分かります。自分の魔法に惑わされている人間が、このような確信に満ちた犯行ができるでしょうか？ 答えはノーです。

以上の根拠を元に、次のように推測します。倉田先輩が、法術の力によって、あたし達の性別を変化させた。違いますか？」

そう言って、香里は佐祐理をにらみつける。どこかあきらめたような表情を見せている佐祐理、そして、肩が怒りに震え、今にもぶち切れて暴走しそうな舞。

「……佐祐理にそれは不可能だ！ 何度も言っている！」

ありったけの怒りと憎しみ 親友をけなした正義の怒り をぶつける舞。その視線すら、香里は涼しい顔で受け止める。そして、また言葉の糸を紡ぎ出す。

「そうですね、それも説明しなくてははいけません。『完全な法術をかけるタイミングはなかった。不完全な法術は、佐祐理の体力が持たない』。調査の時、倉田先輩の犯行不可能性を証明するために、川澄先輩はこういいました。川澄先輩、間違いありませんね？」

こくり。舞がうなずく。しかし、その視線は香里を外さない。そして、その視線に答えるように、香里も舞を見つめる。

「簡単な発想の転換です。倉田先輩は、実際に法術を使い、そして実際に体力が持たなかった。違いますか、倉田先輩」

その視線と声の対象が、舞から佐祐理にシフトする。

「佐祐理の使える魔法は、対象の属性を入れ替えるたぐいの魔法です。それを使って、どうやってこのような事態を引き起こせばいいのでしょうか？」

「倉田先輩の今の一言で、全てが解けました。あたしと相沢君の『性別』という属性を入れ替えたのですね、先輩は。そして、おそらくは対象指定に失敗した。違いますか？」

その先にいる佐祐理は。まるで香里を祝福するかのように、微笑んでいた。

「あははーっ、やっぱり、証拠は残っちゃうんですねーっ」

沈黙が支配する、重い空間。その中で、佐祐理は一人だけ笑っていた。

「さすがは美坂香里さん、佐祐理をクイズ大会で破っただけの頭脳の持ち主だけではありませんね。分かりました、香里さんは元に戻しますよ〜っ」

そう言うと、佐祐理は舞に向き直る。

「舞、佐祐理をかばってくれようと頑張ってくれて、ありがとう。でも、ごめんね」

「.....佐祐理.....」

「ちょっと待っててね、すぐに片付くから」

そう言うと、今度は祐一に声をかける。

「相沢さん、ずっと、そのままの姿でいてください」

「はい？」

それだけ言うと、佐祐理は香里の姿を正面でとらえ、手をかざす。

「空と大地に埋もれし、あまたの神々よ。我が名は倉田佐祐理。汝らが力を持ちて、我が命に従いたまえ。.....かの者の理と、我の理を入れ替えよ！」

詠唱に合わせて、光が佐祐理の身体を包み込む。何人たりとも動けない、光の結界。詠唱がすすむたび、光が強くなっていく。そして、佐祐理の声がやむと、あたりはまばゆいばかりの光で視界がホワイトアウトする。

光が収まったとき、香里は、元の女性の姿に完全に戻っていた。しかし、祐一の身体に変化はない。

「お二人とも、ご協力に感謝いたします」

その代わりに、佐祐理が男性の姿をしていた。

4.2

「一弥君？」

男性の姿をした佐祐理のいるその場所に、この場にはいないはずの声が響く。美坂栞。彼女は、いつもと同様に、裏庭で過ごすつもりだった。足を向けてみたら、まばゆいばかりの光が目に入り、急いでたどり着いたら、4人の生徒がいた。

栞の視点では、そこにいる人間は以下の通り。見知らぬ女子生徒が1人と、女の子に戻った香里と、女の子のままの祐一と、そして、死んだはずの倉田一弥。

「栞ちゃん、ただいま」

そんな認識をしている栞に、佐祐理ははっきりと告げた。

「一弥君.....生きてたんだ.....」

栞は、その一言で自分の認識を確かなものにし、佐祐理に飛びつく。

しかし。

佐祐理は、栞を避けた。

「えっ？」

バランスを崩した栞が転倒する。あたりに雪はないが、土が軟らかいためそれほどのダメージにはならない。

「一弥君、どうして？」

起きあがることもせず、避けたことを責める栞。青年は、栞を後目に、舞に近づく。

「僕を支えてくれるのは、栞ちゃん、君じゃない」

そして、

「舞だけが、僕の生き甲斐なんだ」

舞に正面から抱きついた。

「一弥君……」

うつむく栞。天国から地獄へと人を突き落とすのは、非常に簡単なことらしい。

「栞ちゃん、10年前の過ちは、もう償えないんだよ」

そして、とどめの言葉を吐く彼の表情は、憎しみでも嫌悪感でもなく。

悲しみの表情一色だった。

「くだらない茶番ね」

香里が、そのやりとりを見て小さくつぶやく。祐一は、全てを理解したような表情の香里に、今何が起きているのかを尋ねる。香里は簡単に状況を説明した。

倉田佐祐理には、幼くして亡くなった弟がいた。名前を、倉田一弥という。そして、おそらくは家の継承者問題が絡んでいるのであろう、佐祐理には、一弥になりすまして生きる理由があった。

そして、今、佐祐理が一弥になりすましたときに選んだパートナーは、一弥のことをよく知っている栞ではなく、佐祐理のことをよく知っている舞だった。

そして、栞を拒否して舞を選んだ佐祐理。一弥（に見える佐祐理）に拒否されて落ち込んでいる栞。その2人の空気が、香里の追及の手を止める。

こうして生まれた膠着状態で、祐一の問題が棚上げされつつある。が、今の状況では何を言っても無駄だろう。全てを説明したあと、香里はただ沈黙し、佐祐理を見た。

祐一は、現在の状況について考える。

今は、佐祐理が場を支配している。栞は、佐祐理を一弥と勘違いして、勝手に落ち込んでいる。まるで世界が終わったかのよう。舞は、親友の女性であるはずの男性に受けた告白に、赤くなって身動きもとれない。まるで恋に落ちているかのよう。

『恋はいつだって唐突だ。』

国語の問題から連想されるのは、教師・沢渡真琴。その名前から、祐一は年の初めに水瀬家に居着いた居候のことを思いだした。彼女が家に来たとき、意味不明の言動を繰り返すその記憶喪失少女を追い払おうとした際、秋子は、

「それが誤解なら、解いてあげる」

と言って少女の証言を認め、数日の猶予を与えた。

そう、それが誤解なら、解いてあげる。

舞には、相手が「本来男性ですらない、親友の佐祐理である」という認識を取り戻させる。栞には、相手が「一弥ではなく、姉の佐祐理である」という事実を突きつける。

今の雰囲気を一変させるには、足下から崩す。秋子の言葉を信じ、祐一は栞に近づいた。

「栞、何ぼーっとしてるんだ？」

祐一に掛けられた言葉に、栞は絶望的な表情を変えないまま、一弥に嫌われた、と答えた。

嫌われた理由を教えてやる、そう前置きして、祐一は言った。

「その前に、ひとつ聞いておこう」

「……なんですか？」

「俺が、どんな存在に見える？」

「相沢祐一さん……私の、今の恋人です。でも、今は女の人です」

「そのとおり、良くできました。さて、ここから、推測はついたか？」

「え……まさか……目の前の一弥君が、一弥君とは、別の女の人？」

「正解」

そうとうと、祐一は栞の頭をなでる。答えた瞬間は祐一の言葉を疑ってかかっていたが、一瞬の後、栞は目を見開いた。栞にも思いつく節があったらしい。そう、正解は倉田佐祐理。

「綺麗で、とっても厳しくて、一弥君にとっても冷たかった、一弥君のお姉ちゃん」

栞がその言葉を発したそのとき、佐祐理に異変が起きた。

「一弥……ごめんね……」

震えたまま、言葉を紡ぎ始める。

「わたしが厳しかったから、わたしが冷たく接してたから……」

そのことばが、だんだんと……機械的になっていく。

そして。

「わたしがくらたけのちょうじょだったから、わたしがかずやをりっぱなくらたけのちょうなんにしたいとおもったから、わたしがかずやのともだちをおおくできなかったから、わたしがかずやのことをかんがえてあげられなかったから、かずやは、さみしくて、かなしくて、くやしくて、すきなこにもきちんとせつすることができなくて、たったひとりのすきなこのことをはなしてくれても、わたしがちゃんときいてあげられなかったから、わたしはかずやのきょういくがかりじゃなくておねえちゃんだったのに、おねえちゃんみたいにせつすることができなくて……」

佐祐理は、青ざめた顔で、震えながら、マシンガンのように、無機質な言葉を重ねる。

「わたしのせいで、わたしのせいで、わたしのせいで、わたしのせいで……」

その言葉に、意味も、そして、感情も消える。目には何も映っておらず、ただ、涙ばかりが流れる。

「わたしがかずやをころしたの、わたしがかずやをころしたの、わたしがかずやをころしたの、わたしがかずやをころしたの、わたしがかずやをころしたの、わたしが……」

壊れた機械とは、こういう状態を指すのだろうか。意味も入力もない、感情のリミットサイクル。ただひたすらに言葉を重ねるだけの周期的行動。

「……佐祐理！」

舞が佐祐理を揺すり、その状況を変化させる。

「舞？」

「……佐祐理には、わたしがついている」

舞はそう断言すると、佐祐理に抱きついた。

「そうだったね、舞」

佐祐理は、密着した舞のおかげで、平静を取り戻した。

4.3

「さて、茶番劇はそれくらいにしてください」

香里が声を張り上げる。

「佐祐理先輩、いい加減相沢君を元に戻していただけませんか？」

「断ります」

にべもない。

「理由を説明していただきましょう」

香里の言葉に合わせて、佐祐理が言葉を紡ぐ。佐祐理の言葉は、目的を倉田の跡継ぎを作ることとした。が、佐祐理は舞と暮らしていきたいために、自らを男とする計画を立てた。香里が男になったのは、不完全な魔法による対象指定のミスとのこと。

要するに、香里の推測は全て真実をついていた、ということになる。

「そんな旧い日本の体質ふるに縛られて、どうするんです？」

香里の言葉に、佐祐理はそれが本質だ、と答えた。ルールは厳然として存在し、それが消えるときは世界が消えるときのみに限られる。世界が消えることによって生まれる新しい世界は、古い世界を受け継いだものではない。すなわち、古い世界のルールは厳然として存在しなければならないのだ、と。

「じゃあ、俺はどうなるんですか？」

だが、そんなことは佐祐理ひとりに限ったことではない。性別という、社会と生物の本質　ルール　を想定外に変化させることは、まさに世界が消えたという表現にふさわしい。

香里の性別は戻ったが、祐一の性別は女のまま。

「何にもしてないのに、いきなり性別変えられて、そのまま生きて、そんなの、間違ってるだろ！絶対！！」

祐一の叫びに、佐祐理が答える。

「相沢祐一さん、あなたは名家を一つ救ったんです。それで、あなたが失ったものは何もありません。ただ、新しい視点を手に入れただけです」

「……」

佐祐理の言葉を聞き、祐一の表情に、憎しみの色が浮かぶ。

「もし、あなたが望むなら、あなたの人生は最大限、倉田家がバックアップします。そうでなくても、男女両方の経験があるというのは、とんでもなく強い武器になります。そんな武器を持ったあなたが、人生で失敗する理由がありません」

「いや、あるだろ……」

そんなゆがんだ経歴の持ち主を、どの企業が採用する？そんなことも思いつかないのか。祐一は、佐祐理の言葉を一瞥する。

「それに」

佐祐理の口調が変わる。

「今、僕は男ですが、女だった頃に比べて、魔法を行使する力ははっきりと落ちています。この前やさっきのように、性別　人間の本质に近い、複雑なものを交換するだけの力は残っていないんです。おわかりいただけましたか？」

佐祐理は、祐一を、ただ見つめる。周りにいる、香里、舞、菜の3人も、同じように祐一を見つめる。祐一の表情から、一瞬浮かんだ憎しみの表情が消え……絶望一色に染まる。

「分かりました、もう二度と戻れない、ってことだけは」

「本当に申し訳ないんですが、恨むなら、倉田家のシステムを恨んでください」

佐祐理はそう言い放つと、舞に一声かけて、その場を去る。舞もその後続く。

そして、相沢祐一の日常を取り返すことができずに、残された2人。

「着替えたら戻るわ」

香里の表情に、疲れが見えた。

4.4

その日の夕方、卒業式の片づけを終え、くたびれ果てた北川は、牛井専門店でお茶をすすりながら、長々と会話をする男女のカップルを見た。

『Uの字テーブルの向かいに座った奴といつ喧嘩が始まってもおかしくない、刺すか刺されるか、そんな雰囲気がいいんじゃないか。』

この牛井屋をそう言う風に語った人間がいる。しかし、その2人にはそんな言葉は無縁に思われた。

川澄舞と倉田佐祐理。

翌日になって2人の名前を聞いた北川が、この世界がまた信じられなくなったというのはまた別の話。

その一方、水瀬家に向かう4人の少女たちは、なぜか水瀬家の玄関先でベルを鳴らす、メイド服の女性を見かけた。

「うぐう……誰もいないよお……」

「あゆ、今度はうちから食い逃げか？」

祐一が、女性に話しかける。が、彼女の反応は、祐一が予想していたものとは全く違っていった。

「あなたは、あゆをご存じなのですか？」

その言葉に、とまどいを覚える祐一と菜。

「申し遅れました、私、あゆの姉に当たります、月宮ますみと申します」

女性が名乗ることで、なるほど納得がいった。

「俺は相沢祐一、あゆの遊び仲間と思っていただければ」

「わたしは水瀬名雪、祐一の従妹です」

「あたしは美坂香里、あゆさんとは、小学校低学年の頃、同級生でした」

「その妹の、美坂菜と申します」

「皆さん、よろしくお願ひいたしますね」

自己紹介が終わったところで、本題に入る。月宮ますみが、祐一に封筒を差し出す。封筒には、極秘と書いてある。

「相沢さん、中身を確認していただいていいですか？」

月宮のその言葉に、祐一がとまどいながらも、封を開ける。

「戸籍の変更願に、医師の診断書？」

祐一が診断書に目を通すが、ドイツ語の筆記体のため読めない。

疑問に思った祐一が、月宮をにらみつける。

「うぐう、ちょっと見せていただいていいですか？」

月宮が祐一の診断書を見ると、不思議そうな顔をした。

「女性仮性半陰陽？」

その場の誰にも、聞き慣れない言葉だった。

月宮の説明によると、性別関連の遺伝子異常が原因で起きる先天性の病気で、男性と女性の境目のような状態の一種である。たとえば、肥大化したクリトリスがペニスに見える、ペニスを持つのに精巣を持たない、などの症状の一種であるが、さすがに病気として希少な例であるため、これを解説していた月宮も、そのあたりの詳しい部分は勉強していないらしい。ちなみに、署名をしてある医者の名前は、倉田家の主治医である。

全員が首をひねる中、月宮はもう一通の封筒を取り出し、今度はそれを自ら開封する。そして、それに目を通して一言。

「えっとですね……その書類は、家庭裁判所に提出するものだそうです」

「……なぜ？」

「いえ、それだけしか書いていません。そういえば、相沢さんって、ふつうの女の子ですよ……？」

んなこたーない。

祐一がそう言うと、香里が今回の事件を簡単にまとめて月宮に伝える。

「つまり、これはスムーズに戸籍変更処理を進めるための書類ですね」

そう言うと、月宮は、

「なるほど、こんな書類の運び手なんて、誰もやりたがらないわけね」

と、佐祐理に文句を言う心づもりを固めた。

「ではこれにて失礼いたします。とりあえず佐祐理お嬢様はあとで詰めるとして、今度は倉田の用事のないところで一緒に食事でもしましょう、あゆのこともたくさん聞きたいですし」

そう言うと、月宮は一礼をしてその場を立ち去り、残りの4人は名雪の鍵を使って水瀬家の門を開けた。

4.5

夜。

水瀬秋子を交えた5人は、祐一のこれからについて話を始めようとしていた。

祐一が、騒動の原因である倉田の魔法により戻るという可能性が潰えたことは、すなわち、未知のルートを探さなければ戻らないということ。そして、祐一の前にある書類。これは、祐一が元に戻るという可能性を、少なくとも倉田佐祐理はゼロであると判断しているという意味に他ならない。

状況確認が終わったところで、秋子が宣言する。

「さて、まずはこの空欄を埋めてしましましょう」

空欄。戸籍変更願にある、唯一の白紙。秋子の宣言は、すなわち、佐祐理の判断を受け入れるということ。その意味に最初に気がついたのは、祐一だった。

「その前に、考えることはありませんか？」

祐一の言葉に、秋子は

「何かありました？」

と返す。表情は緩やかでも、その目は鋭い。

「相沢君、ごめんなさい、でも秋子さんの意見を支持するわ」

香里は今のやりとりの意味に気がついたらしい。香里のせりふで、今のやりとりが戸籍変更願を提出するか否かという問題について議論しているということが、名雪と栞にも分かった。

「祐一さんの好きにすればいいです、結果は後からついてきます」

栞は祐一を支持する。

「お母さんの判断に、間違いはないから」

名雪は秋子の意見に賛同する。

数字だけ見れば3対2。しかし、多数決で決まるほど、ことは単純ではない。すなわち、祐一が折れるか秋子が折れるか。議論という、言葉の殴り合いが始まる。

「祐一さん、勘違いをしてはいけません」

現在明らかに女性である祐一の戸籍が男性。そんな不条理が許される世の中ではない。世間の風を甘く見るな。一般的な意見ではあるが、秋子の言葉は重い。

「秋子さん、俺は負けるつもりはありません」

ピンチはチャンス、不条理こそが世間に切り込む刀となる。そして、相沢祐一である自分を支持してくれる人は決して1人ではない。支持者が少なければ増やせばいい。そして、性別などという概念で吹き飛ばされないような、強固な信頼と地位を築く。祐一の言葉は、戻れないことを知った時点より、現在のほうが前向きである。それが本音が強がりかは、本人のみが知る。

「言うはやすし、行うは難し、ですね」

その祐一の言葉を、秋子はあっさり蹴る。

「では伺いましょう、祐一さん。どうやって、大学に合格しますか？」

実績のない者が何を吠えても無駄だ。秋子の言葉に、祐一は全く反論できなかった。祐一の意気を無理矢理折る。秋子の論法は、容赦がなかった。

(倉田のバックアップ、という手があるにはあるのよね……)

そのやりとりを横で聞いていた香里の解答が正しいかどうかは、誰も知らない。所詮は見つからなかった選択肢なのである。

4.6

「では、空欄を埋めてしましましょう」

秋子が、張り切った声で再度宣言する。明るいとしか形容できないその声が、逆に雰囲気重くする。

「まず、名雪の案を聞かせてちょうだい」

「祐子^{ゆうこ}じゃあありきたりだから……わたしの名前も付け足して、祐名^{ゆうな}とか祐雪^{ゆうき}っていうのは？」

「いいわね、香里ちゃんは？」

「相沢君の名前の文字も入っていることですし、倉田先輩と入れ替わったという点で佐祐理、ですか……あまり参考にしないで下さい」

「あら……では、栞ちゃんは？」

「せっかく名前を変えられるんですから、お揃いにしたいです。『さおり』とか『しのり』とか『しおん』とか」

「どう？ いい名前はあったかしら？」

秋子の言葉に、祐一がとまどう。そして、一瞬考えた後。

「香里の案に少し近いんですけど、祐一・佐祐理の祐に、倉田一弥の弥、という文字を当てはめてみたいですね」

読み方は分かりませんが、という祐一。

「弥^{みろく}様の読みをいただいて、祐弥^{ゆみ}というのはどうでしょう？」

秋子の提案にその場の全員が頷く。そして、提出書類は完成した。

あとは、当面困るものと、1年以上先の身の振り方の話。前者は女4人の知恵があり、後者は今考えても仕方ない話。先ほどとはうって変わって、会議はスムーズに進んだ。

そして。

「わたしは、相沢祐弥。17歳です」

「相沢君、もっと肩の力を抜いて」

「あ、ああ……」

「女の子は、『ああ』なんていう返事の仕方をしない！」

「……はい」

相沢祐一だった人間が、相沢祐弥として生活する特訓の、第一歩が始まった。

end

あとがき

書き終わってから2年。書き始めてからだと、実に2年半。その間、本物のミステリーやアンチミステリーの作品にたくさん触れて。「マリみて50のお題」「降りかかる災い・倉田佐祐理編」なども書いて。そして、卒業論文による、プレゼンテーションの練習。これらを経て、文章力が圧倒的に伸びていったのは間違いありません（圧倒的にのびた先でもまだまだのびる余地はありますし、奥深い日本語の世界にたゆたう人間として、この程度の文章力で十分とも思っていないが）。

そして、「降りかかる災い・倉田佐祐理編」による、「祐一&香里編」の裏打ち作業を始めるに当たって、2年ぶりに読み直してみると矛盾や不合理があるわあるわ（設定上の問題とかじゃなくて）。そういった部分を修正し、書き改めたのがこの作品です。ただし、WebSSとして公開するのは正直あまり面白くないと感じまして、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 組版システム上でみかちゃんフォントを用いた、Adobe PDFファイルでの提供としました。

各種Webサイトからいろいろ情報取ってきてますが、しよせんSSですので、小難しい引用はいらないでしょう。では、今回はこれにて失礼いたします。次回作でお会いしましょう。